台大日本語文研究第 23 期
2012 年 6 月，頁 75-100
2011-10-30 收稿，2011-12-05 通過刊登

江戸川亂步「紅色的房間」
── 論其影響關係 ──

黃如萍*

摘要

江戸川亂步的「紅色的房間」於大正十四年（年）四月發表於『新青年』雜誌。在亂步研究史上，針對這篇作品，以及和不同作家之作品間的影響關係等研究文獻卻不豐富。

而在這些研究文獻當中，皆論及本作與谷崎潤一郎作品「途上」（『改造』大正九年一月号）之間的相似性。亂步作品與谷崎作品之間的關係，可追溯自亂步在自作中或日後言論曾經直接提示與谷崎作品之間的影響關係。

因此在研究史上，大多是把這些視爲一個重要參考指標而進行論述的研究文獻。也就是把實際亂步具體舉出的谷崎作品名爲一線索，探討谷崎作品對亂步作品所產生的影響。但是調查結果發現，實際上「紅色的房間」中卻有許多小說要素，直接或間接地取材自其他作家作品的設定與方法。

因此，這樣的一個研究現況，顯示了「紅色的房間」作品中的影響關係上，尚存許多未開發的空間。本論文在研究方法上，將以文本閱讀的方式來解讀此篇作品。唯有透過亂步作品中所呈現的這些要

* 國立高雄餐旅大學應用日語系助理教授

素，再深入論及其影響關係，以這樣的觀點來探討，才能找到存在於亂步創作方法中本質上的問題。

關鍵詞：亂步、「紅色的房間」、影響

The Discussion on its Influence relations of Edogawa Rampo's "The Red Chamber"

Huang, Ju-Ping*

Abstract

Edogawa Rampo's "The Red Chamber" was published in "Shinseinen" magazine in April 1925. Seldom are, however, the research documents about this work and its interrelationship with other author's writings in the history of Rampo study.

The similarity between this fiction and Junichiro Tanizaki's "Tojou" that was published in "Kaizō" magazine in January 1920 had been mentioned among these research documents. The relation between Rampo and Tanizaki's works can be traced back from Rampo's later statements or fictions, which pointed out its interrelationship with Tanizaki's works.

Therefore, most deem those materials as important reference resources in the history of research, considering Tanizaki's works mentioned by Rampo in his writings as a clue to study the mutually influence. In fact, there are many elements of fiction in "The Red Chamber" originating from the setting and style of other writers' fictions.

The situation in research now reveals a lot of undeveloped space left to be study. In this essay, "The Red Chamber" will be interpreted in the way of text reading. Only through the elements revealed in Rampo's works, the essential problems concealed in Rampo's creating way can be discovered by probing into it's influential relationship.

Keywords: Rampo, "The Red Chamber", influence

* Assistant Professor, National Kaohsiung University of Hospitality And Tourism

江戸川乱歩「赤い部屋」
——摂取の関係を兼ねて——

黄如萍*

要旨

「赤い部屋」は大正十四年四月『新青年』で発表された小説である。研究史において、この作品と他作品との関連について指摘した論考は数少ない。その数少ない先行論において注目されるものとして、本作と谷崎潤一郎作品「途上」（『改造』大正九年一月号）との影響関係を指摘したものが挙げられる。それは、乱歩が自作に谷崎の作品名を挙げていたり、後日談で触れたりしていることに遡ろう。

研究史ではそれをもとに、乱歩作品における影響関係が指摘されてきたものと考えられる。すなわち、実際乱歩が作品に書いたものを手掛かりとし、論じられてきたのである。しかし、調査によると、「赤い部屋」は他の作品からの摂取の跡も見られるのである。これは、作者の直接的な言及が重視されるあまり、作者によって触れられなかった作家の作品や、創作方法の類似が看過されたのであろう。

したがって本論では、「赤い部屋」という一作品を読み解くことを優先する。それによって、「赤い部屋」の摂取問題、そして作者の創作的営為を貫くものという基本的方向性が見い出せるのである。

キーワード：乱歩、「赤い部屋」、影響

* 国立高雄餐旅大學応用日語系助理教授

江戸川乱歩「赤い部屋」
――摂取の関係を兼ねて[1]――

黄如萍

一、問題の所在

「赤い部屋」(大正十四年四月『新青年』)は従来研究史においてそれほど多く論じられてはいない。その数少ない研究においては、他作品との関連が論じられてきたきらいがある。たとえば、「谷崎の「途上」からは、乱歩の「二廃人」、「赤い部屋」が想像されるだろう、主人公が傷ついた肉体を持つという点で「芋虫」や「盲獣」は、谷崎の「春琴抄」を思い出させる」[2]、「確立を利用した殺人という点で、谷崎潤一郎の「途上」に似ている」[3]と指摘されている。

それらの先行論文[4]を参照すると、他作品との関係、いわば本作における受容の問題が取り上げられていることがわかる。その受容の問題は、乱歩作品や自身の後日談、或いは読書遍歴と深く関わっていることが窺われる。

例えば、乱歩自身、谷崎との関係について度々書いているが、その代表として『探偵小説四十年(上)』[5]には「職業転々の時代に、時を隔てて私を非常に感動させた文学者が二人あった。一人は谷崎

---

1 本論文は九十八年度行政院国家科学委員会研究計画による研究成果の一部である。(98-2410-H-328-012)

2 槌賀七代「谷崎潤一郎」、志村有弘編『江戸川乱歩　徹底追跡』平成二十一年十一月、勉誠出版、p.210。

3 荒正人「解説」『江戸川乱歩傑作選』昭和三十五年十二月、新潮社、p.298。

4 百瀬久(「江戸川乱歩「心理試験」論―休筆の理由あるいは予見―」『東洋』平成二十年六月)は「暗号は乱歩の言葉を操ろうとする意識の現れ」ということに触れ、「言葉で唆し誘発させた殺人」(p.28)として、「赤い部屋」という作品を挙げている。また、青柳由紀は(「江戸川乱歩初期作品論―〈幻想〉と〈写実〉をめぐって」『筑紫語文』平成二十年十月)本作が谷崎の『途上』に感銘を受けて作られた作品と指摘したが、「犯罪痕跡を全く残さない「写実」的な殺害方法は両作品共通しているものの、『途上』には、「幻想」的要素はほとんど無い」(p.29)と指摘している。

5 初版は昭和三十六年七月に、桃源社から出版された。現在、光文社文庫から『江戸川乱歩全集　第二十八巻　探偵小説四十年(上)』(平成十八年一月)、『江戸川乱歩全集　第二十八巻　探偵小説四十年(上)』(平成十八年二月)として刊行されている。

潤一郎、一人はドストエフスキー」[6]と述べられている。また、「私は小説を書き出すずっと前から、谷崎潤一郎、佐藤春夫両氏の小説に魅了され、心酔していた」「白状すると、私は潤一郎、春夫、浩二という順序で傾倒して来たもの」[7]と述べられている。さらに「赤い部屋」の筋は上京以前から考えていた。これは谷崎潤一郎氏の「途上」をもっと通俗に、もっと徹底的に書いて見ようとしたのだ」という「自作解説」[8]により、自ら素材の元を提示した。そのため、研究史では乱歩のその言説に影響を受け、谷崎の作品と乱歩作品との間にどのような影響関係があるのか、が論じられてきた[9]。

しかし、それらの論はあくまでも、乱歩の後年の言説が先行してしまうものである。或いは、他作品との共通性が見られるといった指摘に留まるものがほとんどで、これまで小説全体の構造のなかで読まれてこなかったという問題点がある。したがって改めて本作の影響関係を考察することにおいては、別の視座を設定しなければならない。つまり、「赤い部屋」という小説における摂取問題について考察するため、本作を一小説として読むことを優先する。そして、この小説が他作品から何を取り入れているのかを明らかにすることで、作者の創作的方向性が見い出せるのである。本論では、その一端を作品の構造と物語の設定から明らかにしたい。

二、恐怖という要素

「私」は冒頭で「今夜の話し手が、何事か怪異な物語を話し出すのを今か今かと待ち構えていた」(p.309) と述べており、ここから「赤い部屋」に集まる会は「怪異な物語」(p.309) を語る会であることが分かる。しかも、「ロマンチックな蝋燭の光が、その静脈から

---

6 注 5 を参照。引用は「処女作発表まで」(p.43) (この章昭和二十四年下期執筆) による。

7 注 5 を参照。引用は「探偵作家専業となる」(p.107) (この章昭和二十五年中期より二十六年上期に執筆) による。

8 「 I「あの作この作 (楽屋噺)」より」昭和四年七月に書かれたものである。引用は『江戸川乱歩全集　第一巻　屋根裏の散歩者』平成十八年七月、光文社文庫、pp.339-340 による。

9 注 2 を参照。

流れ出したばかりの血の様にも、ドス黒い色をした垂絹の表に、我々七人の異様に大きな影法師を投げていた」（p.309）と、漂っている恐怖感が描かれている。そのほか、さらに、「太い蝋燭」（p.309）「蝋燭の焔につれて」（p.309）「蝋燭をすかして」（p.309）「蝋燭の火を見つめながら」（pp.309-310）など冒頭から何回も「蝋燭」のことが反復されることによって、日本の伝統的な怪談会のスタイルのひとつである「百物語」のことを容易に思い出せる。周知のように、百物語の進行における主なプロセスとは、怪談話を百話語り終えると、本物の怪が現れるということである。それは、森鴎外の「百物語」を参照することができよう。森鴎外の「百物語」（明治四十四年十月『中央公論』）では、「それは僕が百物語の催しに行つた事である」（p.129）、「百物語とは多勢の人が集まつて、蠟燭を百本立てて置いて、一人が一つ宛化物の話をして、一本宛蠟燭を消して行くのださうだ。さうすると百本目の蠟燭が消された時、真の化物が出ると云ふことである」（p.129）と「百物語」の進行の方法が紹介されている。

本作の冒頭から読者に恐怖を与え、そしてこれからの話は怖い話だと事前に一種の〈暗示〉をかけている。しかし、それのみならず、あえて読者にその「私」が形容する怖い雰囲気を感じさせ、また「赤い部屋」「怪異な物語」「話手」「蝋燭」「百人」などのキーワードで醸し出された恐怖の雰囲気を感じさせるのは何故であろう。

「私は戦国時代の豪傑の様に、あの百人斬りを、無論文字通り斬る訳ではありませんけれど、百人の命をとるまでは決して中途でこの殺人を止めないことを、私自身に誓ったのです」（p.320）「私は丁度九十九人だけ済ませました。そしてあと一人になった時」（p.320）「では、その九十九人をどんな風にして殺したか」（p.320）「皆さん。私はこんな風にして九十九人の人命を奪った男なのです」（p.331）とTが殺人の数について「九十九人」で「あと一人」と、百人という数に何回も触れている。しかし、何故百人でなければいけないのか、その理由が全く説明されていない。ただ、当然のように、殺人

が百人に達さないといけないというように語られたのである。

先述したように、「赤い部屋」「怪異な物語」「話手」「蝋燭」「百人」などのキーワードの羅列によって、読者は容易に「百物語」を想起させられる。「百物語」における、「百本目の蠟燭が消された時、真の化物が出ると云ふことである」（p.129）という展開が見られる。このように、殺人が百人に達したら、特別な何かの結果を期待してしまうという暗示がかかっていると考えられる。言い換えれば、Tの話によると、もうこれ以上「他人を殺」すのではなく、「最後の百人目だけは自分自身（論者注：T氏自身）の為に残して置いた」（p.335）という特別な意味づけをするのである。百人目は、「今度は自分自身の命を犠牲にしようとしている男」（p.332）のように、とうとう自分のことを殺害することが明示されている。したがって、その意味付け、言わば百人目はT自身を殺すのだと思わせることを促し、そのため、読者にTがやはり給仕女に打たれて死んだのだと、信じ込ませてしまった。しかし、それは演技だったことが判明することによって、物語結末におけるどんでん返しが成功したのである。

このように、本作は「百物語」の背景をなぞっていることは詳細に説明しないが、結果として「百物語」を読み取らせる仕組みになっている。つまり「百物語」の内容を既に知っている読者を対象として書かれており、読者が読み進めるうちに、「百物語」の要素を認識しつつ読んでいくという前提があると考えられる。読者にそれなりの〈知識〉を要求していると考えられる。またその〈知識〉は、最後のどんでん返しを形成するための重要な要素だと言える。

三、Tの告白

（一）言葉の裏側

Tの話には「せめて筋道の通った話の出来る間に、私は誰れかに私のやって来た事を打開けて置き度い」（p.313）「ただ私のこの変な身の上話を聞いて貰い度い」（p.313）という前提がある。しかし、Tの話を追っていき、Tの話を最後まで（論者注：「皆さんどうか御

判断なすって下さい。私は狂人なのでしょうか。あの殺人狂とでもいうものなのでしょうか」（p.332）聞かないと、結局Tが一体何を「皆さん」に判断してもらおうとしたのか、読み進むに従って極めて曖昧になってくることが分かる。本章では、Tの告白が果たしている役割に注目することで、Tの思考回路を理解し、Tはどんな話を「皆さん」に伝えようとしているのかを知るためにTの告白を分析していくことにする。

Tが話しているうちに、「皆さんはびっくりなさるかも知れませんが……人殺しなんです」（p.312）「皆さん。皆さんは嘗てこういう殺人法について考えられたことがおありでしょうか」（p.318）「皆さん、何と安全至極な殺人法ではありませんか」（p.319）「皆さん笑ってはいけません。私は戦国時代の豪傑の様に」（p.320）「皆さんも私の所謂絶対に法律にふれない殺人法を、大体御分り下すったことと思います」（p.328）「皆さんもこの様な残酷な話は、もうこれ以上御聞きになりたくないでしょう」（p.328）「皆さんも当時の新聞記事できっと御読みのことと思いますが」（p.329）「皆さん、私はこんな風にして九十九人の人命を奪った男なのです」（p.331）「皆さんは、あまりにも残酷な私の所行に、それその様に眉をしかめていらっしゃいます」（p.332）など、「皆さん」の反応を非常に、意識していることが分かる。もちろん、「皆さん」を対象にしているため、「皆さん」の反応を意識していることは当然であるが、Tは「皆さん」の気持ちを勝手に詮索し、結論を付けようとしていることがわかった。

また、Tが告白しはじめた際、「あれも退屈だ」（p.311）「世の中の事柄に退屈し切っている」（p.311）「退屈なればこそ」（p.311）「退屈の説明」（p.311）「退屈がどんなものだか」（p.311）「退屈屋の私」（p.312）「退屈し切っていた」（p.312）「退屈し過ぎていた」（p.312）「退屈をまぎらす目的のため」（p.313）「一匹の退屈という名前を持った動物」（p.314）などのように、「退屈」という言葉が繰り返されていることが読み取れる。そのため、「もうそういうありふれた刺戟には飽き飽きしていた」（p.312）「その人殺しという血腥い刺戟にす

ら、もう飽きあきして了った」(p.313)「あらゆる刺戟に飽きはてて」（pp.313-314）と、今まで停滞した単調な生活に厭々して何か新しい「刺戟」に対する欲求が明確化されている。それによって、「血みどろになって狂い廻る断末魔の光景」(p.323)「死骸にして見たいという異常な望みがあった」(p.325)「夥しい血潮が赤黒く固っていた」（p.327）などに対する異常な渇望が見られる。

以上のように、それらの言葉で何回も繰り返し語られるのは、何かの意図が込められているはずである。つまり、「退屈」と「刺戟」という言葉が多用されていることは、そこから生じる殺人への執着の度合いを強化する効果を持つのである。

しかし、果たして彼の言葉は、信ずるに足るものであろうか。以下、Tの殺人の最中に発した言葉を取り上げることにする。Tの「法律に触れない殺人法」とは一体何であろうか。まず、Tが起こした自動車事件を挙げてみよう。

自動車事件でTは、「ここを右の方へ一町ばかり行くとK病院という外科専門の医者がある」（p.316）かわりに、「ここを左の方へ二町ばかり行くと左側に赤い軒灯の点いた家がある」（p.315）とM病院という藪医者を教えたせいで、怪我人は死んでしまった。そして、その流れから、「知っていたのに何故間違ったことを教えたか、その時の不思議な心理状態」（p.316）を「胴忘れ」として解釈されるようになった。

この自動車事件でTは「その時の私の指図次第によって、老人を生かすことも殺すことも出来た訳なのです」（p.317）と自分の発した言葉の力を発見した。ここで、彼は、自らの言葉が人々の間にどのような効果を発揮しているのかを自覚しているのだ。そしてそのパターンが、小説のなかでくり返されている。

- 「危いッ」と声をかけた私は明らかに殺人者です。（略）それに「危いッ」という注意の言葉はどんな風に解釈して見たって、好意から出たものとしか考えられないのです。表面上では、死者から感謝されこそすれ、決して恨まれる理由がないのです。

（p.319）

- 「私はその子供に、こう声をかけました。／「おい坊っちゃん、その針金へ小便をかけて御覧。とどくかい。」／すると子供は、／「なあに訳ないや、見てて御覧」（略）子供はピョンと一つ踊る様に跳び上ったかと思うと、そこへバッタリ倒れて了いました」（p.324）
- 「火事場でわが子を求めて半狂乱の様になっていたどこかの細君に、（略）「ソラ泣いている声が聞こえるでしょう」などと暗示を与えて、その細君を猛火の中へ飛込ませ、つい焼き殺して了った。（p.328）
- 「オーイ、飛こんで見ろ」／と友だちに呼びかけました」（p.326）

以上の例は、Tの言葉に警戒せず、素直に従ったために、殺害されたものである。Tの言葉には、誘導という要素が含まれているため、従ってしまったら、殺害という結果になるのである。ここで、Tの言葉は理想的に彼の思惑通りに機能したと言えよう。一方、Tの言葉は誘導ではなく、正しい判断の言葉のように見えたが、同じ殺害の結果にもなるのである。

たとえば、按摩を殺害することも、按摩に「ソラ危いぞ、左へ寄った、左へ寄った」と「態と少し冗談らしい調子で」（p.321）言ったのだ。そして、按摩は「日頃の性質から、きっとからかわれたのだと邪推して、左へはよらないで、態と右へ寄るに相違ないと考えたから」（pp.321-322）と推測した。そして推測が当たったため、按摩は「反対の右の方へ二足三足寄った」（p.322）ため、「底へ落ち込んで了った」（p.322）のだ。按摩の「日頃の性質」がよく分かっていたため、正しい勧めの言葉で語っていても、反対に按摩を逆方向に誘導してしまう力を持つのである。

また、「今や身投げをしようとしている娘の背後から、突然「待った」と頓狂な声をかけて、（略）其娘をハッとさせた拍子に水の中へ飛込ませて了った」（p.328）ことが挙げられる。「待った」というの

は、正しい判断の言葉のように見えたが、Tの説明によって、逆な効果をもたらしてしまったのだ。

さらに、「ふと一つの、石塊を崖から下の線路の上へ蹴落して了いました。(略)ぐずぐずしているよりはと思って、ここへ駆けつけた次第ですが、どうでしょう。至急あれを、取りのけて頂く訳には行きませんでしょうか」(pp.330-331)も、正論を語っているように思われるが、本当は下心があるため、十七人の命を奪うことに成功したのである。

このように言葉が発せられていること、きわめて正しい判断の言葉が語られることに注目して読み解きたい。Tの用いた言葉は正論であるが、殺人につながる、迫力のある言葉であることが分かる。Tの言葉に着目すると、一つの共通性が見られる。傍線部のように、言葉の表面上では、あくまでも相手の状況を考慮にいれて発した言葉のように見られるが、内実はTの人殺しのための打算が込められ、Tに「故意」の可能性があっても証明できないこと、Tの故意の可能性が確かにありうることが提示されているのである。

ここには表面の言葉とうらはらに、偶然の過失を装っている打算が明確に見られる。それはTにとって戦略的なふるまいだと言えよう。したがって、殺人の過程を追っていくと、言葉の裏の意味があり、言葉を額面どおりに受け取れない、ということが考えられる。つまり、Tが発した言葉はTの解釈によって決して言葉の表層通りの意味のままで終わったとは言えないことが分かる。言葉の表層が指し示す明示的な意味通りに受け取ることができないという点が、Tの個々の殺人方法には共通している[10]。そして、Tの言葉を額面通りに理解してよいとは限らないということの反面、Tの解釈の重さも同時に生じてくるのである。そして、Tの説明によって、かえって故意と人殺しの方向に「皆さん」や読者を導く要素を持ってい

[10] ただし、「高い所で綱渡りをしていた女芸人の注意を奪い、その女を墜落させて見」るのは、言葉の力によるものではなく、「途方もない変てこな姿勢を示す」(p.328)ためである。

たことが分かった。

このように、Tの殺人方法に関する告白を通して、言葉への不信が語られる。しかし、一方、実際、Tが「皆さん」に自分の告白・言葉を信じてほしいと思っていることを忘れてはいけない。それは「皆さん」にT自身の言葉を信じさせ、これからTが告白したように、百人目はやはり自分を殺すのだ、という判断をさせるためなのである。言葉への不信が語られる一方で、「皆さん」に自分の言葉を信じてほしい、という矛盾が同時にTの告白に含まれている。このように、Tはそれらの言葉で形作っていた論理を揺るがされてしまうように見えるのである。

（二）異常を強調する語り

本節では、Tは意図的に人殺しの方向に「皆さん」や読者を導こうとしているのかを明らかにする。そしてそれによって、Tの語りの特徴が窺い知れる。

まず、新入社員のT氏の話が始まる前に、T氏の外観を次のように「私」が語っていることから「私」がどのようなT像を持っているのかは、窺い知ることができる。「私は、陰影の加減で骸骨の様に見える彼の顎が、物を云う度にガクガクと物淋しく合わさる様子を、奇怪なからくり仕掛けの生人形でも見る様な気持で眺めていた」（p.310）とT氏の気味悪さを強調し、T氏を否定的に語っている。読者は冒頭から読み始め、その気味悪いというイメージから、〈異常〉な人の語りを期待するようになるのだ。

そしてそれはこれからT氏が登場することと全く一致している。T氏は自分のことを「真実正気なのかどうか分りません。狂人かも知れません」（p.310）「一種の精神異常者というようなものかもしれません」と自己規定している。それに対して、「私」は「（T氏はここで一寸言葉を切って、気味悪く笑った）」（p.319）と付け加えた。それによって、読者は読み進めているうちに、T氏のことを狂人ではないかと判断するようになるのだ。

Tの告白が続き、「少しだって恨みがあった訳ではなく」(p.320)「決して殺人の動機になる様な恨みがあった訳ではなく」(p.322)「決してその男に恨みがあった訳ではなく」(p.325)と殺人の過程を語る際に、このような言葉が何回も繰り返されている。全く恨みがないのに、赤の他人を殺してしまった自分の異常性を強調していることが見られるのである。

そして、人を殺したか否か不明であるという認識が反復されている。人殺しに対して、次のように示されている。

「いくら酒に酔っていたとは云え、決して正気を失っていた訳ではないのに、私としたことが、何と思ってあの怪我人をM医院などへ担ぎ込ませたのでしょう」(p.315)

↓

「知っていたのに何故間違ったことを教えたか、その時の不思議な心理状態は、今になってもまだよく分りませんが、恐らく胴忘れとでも云うのでしょうか」(p.316)

↓

「これは私の指図が全く偶然の過失だったと考えた場合ですが、若しそれが過失ではなくて、その老人を殺してやろうという私の故意から出たものだったとしたら、一体どういうことになるのでしょう」(p.317)

以上のように、人を死なせたことに関して、曖昧なものになっている。繰り返すことによって、人を殺したか否かという記憶の不確かさに対し、容易にそのようなT氏の語りが、「皆さん」にT氏を狂人だと思わせるのである。

その繰り返しの多さが、言葉どおりだけではなく、読者にそう思い込ませようとしている。言葉の背後に押し隠された心情を語ることによって、かえって明確にする語りの構造になっているのである。

このように見るならば、Tの告白は一貫した意図を提示していることが分かる。以上の理由で、Tの精神状態に対する議論の余地がないのである。

前述したように、「皆さん」の連呼から「皆さん」にこだわり、「皆さん」の反応を意識しながら、告白していることが分かる。しかし、ずっと「皆さん」の反応を詮索している「私」は、本当に「皆さんどうか御判断なすって下さい。私は狂人なのでしょうか。あの殺人狂とでもいうものなのでしょうか」（p.332）と皆さんの判断に委ねるのであろうか。なぜならば、皆さんの判断に委ねなくても、すでに「私」が「狂人」或いは「殺人狂」という判断は出来上がっているはずである。

一体、「私」は何故あえて皆さんの判断に委ねないといけないのであろうか。「皆さん」がTの話を聞いて、Tはやはり「狂人」であると思い込ませ、「狂人」であるからこそ、最後Tは自分のことを殺すのが十分可能であると判断してしまうのである。「皆さん」の判断に委ねる形でしか、最後の芝居が成功するほかはないのである。

Tの話を聞き終えた「私」の捉え直したT像が次のように示されている。

「斯様にして今夜の話し手の、物凄くも奇怪極まる身の上話は終った。（略）そして白目勝ちにドロンとした狂人らしい眼で」（p.332）という描写から、「私」の判断では、T氏が狂人として扱われていることが分かった。さらに、「奇怪な物語りの後のこの出来事は、私達に余りにも烈しい衝動を与えたのだ」（p.335）「あの、ピストルを玩具だと信じさせて置いて、給仕女に発砲させた技巧などは、他の殺人の場合と共通の、彼独得のやり方ではないか」（p.336）という「私」の認識から、彼の狙い、つまり、彼のことを狂人と思わせることはまさに成功したと言える。

Tの話を聞き終えた「私」がどのようなT像を持っているのかは、「T氏」から「T」へという呼称のいきなりの変化も窺い知ることができる。そこには、Tの語りを聞き終え捉え直したT像と、Tが告白する前Tに対して持ったイメージとを統一しているように見える。が、告白する前に、Tの気味悪さを強調し、Tを否定的に語ることによって読者をある一定方向に向けようとする「私」の仕掛け

が「私」の語りには内包されている。そして、Tの告白を聞くことで、Tへの尊敬呼称がなくなり、「狂人」であるTを認識し、単なる「T」になってしまったのだ。Tは「皆さん」に自分のことを「狂人」だと意識させようとする意図が見出されるため、その呼称の変化はまさにTの作戦が成功したことの表れだと言える。

本作は、ノンフイクションとして読んで欲しいとされた物語が期せずしてフイクションであった、というどんでん返しのために逆転を誘いながら読まれると考えられる。読者は必死に本当らしく語られている言説を、最後まで読まないと、〈嘘〉だと見抜くことができない。末尾では虚構を事実に、と見誤ってしまう「皆さん」と共に、同じようにいつのまにかTの告白を事実のように読んできた読者自身が唖然とさせられる対象になっていると言える。すなわち、この作品においての言葉は、虚実の混乱に拍車をかける駆動力の役割を果たしていたのである。

以上のように、言葉への不信を主張する一方、言葉の信憑性を求めるという矛盾を通して読み手に何が問題かを意識させる、という方法が本作品で用いられている。

四、他作品との関わり

前述したように、退屈な状況にいるTがとうとう犯罪に走ることを思い立ったのである。その退屈な生活が次のように示されている。

> そんな風で、一時、私は文字通り何もしないで、ただ飯を食ったり、起きたり、寝たりするばかりの日を暮らしていました。そして、頭の中丈けで色々な空想を廻らしては、これもつまらない、あれも退屈だと、片端からけなしつけながら、死ぬよりも辛い、それでいて人目には此上もなく安易な生活を送っていました。（pp.310-311）

以上のTの生活は「屋根裏の散歩者」（大正十四年八月『新青年』の増刊号）の郷田三郎の状況を想起できる。郷田三郎は「今では、もう次の職業を探すでもなく、文字通り何もしないで、面白くもな

い其日其日を送っている」(p.497) と読み取れる。平野嘉彦[11]はこの郷田三郎を「遊民」だと指摘し、その「「遊民」について、夏目漱石の『それから』の主人公の代助のように、「三十になっても遊民として、のらくらしているという「高等遊民」の系譜につらなっている」と指摘している。

そして、その「高等遊民」の系譜は、乱歩の「D 坂の殺人事件」にも見られる。「D 坂の殺人事件」の「私」は、「まだこれという職業もなく、下宿屋にゴロゴロして本でも読んでいるか、それに飽きると、当てどもなく散歩に出て、あまり費用のかからぬカフェ廻りをやる位が、毎日の日課だった」(p.179) と語っている。

先行論が指摘したように、「高等遊民」の生活はまさに乱歩作品における犯罪者の一つの特徴だと言えよう。それを敷衍すると、「高等遊民」までいかないが、明確な目標がないこと、〈閉塞的〉な状況に陥っていることといった点が類似している他作家の作品が挙げられる。

例えば、志賀直哉「范の犯罪」(『白樺』大正二年十月)、「濁つた頭」(『白樺』大正元年四月)、「児を盗む話」(『白樺』大正三年四月) などが見出せる。

范は妻殺しの前夜「私は近頃自分に本統の生活がないといふ事を堪らなく苛々して居た時だつたからです」(p.272)、「中ぶらりんな、うぢうぢとした此生活が総て妻との関係から出て来た」(p.272) と述べている。范は自身が妻との関係でどれほど〈閉塞的〉な状況に陥っていたのか、自分の状況、立場を主張している。

また、「濁つた頭」の津田が語った内容も想起される。津田は「ある山の温泉場」」(p.224) で「鋭い錐が気持よく台を貫す」(p.225) のを見た途端、「荒んだ無為な生活にある私にとつて鋭い光つた長い錐が厚い台をぶつりぶつりと貫す—其感じ、さういふ痛快な感じのする生活に入りたい」(p.225) という気持ちが喚起された。

---

[11] 「『屋根裏の散歩者』から『猫町』へ—『群衆と観相学／群衆の観相学』の序にかえて—」『ドイツ文学』平成十八年五月、p.2。

「児を盗む話」でも「仕事をよしてゐると、私は益々単調な其日々々が苦しくなつた。それは単調よりも全くの孤独が私を弱らしたのだ。(略) 怒る事もなければ笑ふ事も全くない。第一、胸一ぱいの息もしてゐなかつたと思つた」(pp.293-294) と述べられている。

以上のように、何かの理由で今の閉鎖的な生活に苦しんでいたが、一つの脱出の手段として、殺人や犯罪事件を起こしたことが共通している。そのような閉鎖的な要素は、その時代の雰囲気が漂っていると判断できる。したがって、「赤い部屋」における「私」は、まさにこのような時代言説をそのままに模倣し・反復し、物語化し始めていたと言える。

「赤い部屋」の主な大枠としては「皆さん」がTの語った話を聞いて狂人かどうかを判断する。そして、Tの告白は嘘であること、また、Tは殺されてはいないことを判明することによって、本作のどんでん返しになるのである。

Tの告白の主な流れを見てみると、生活の閉鎖性からの脱出のために、人を殺害する犯行に走った。それにもかかわらず、一体、その犯行が故意か偶然かはっきり判断できない状況になった。さらに、犯罪を起したことに愉快になったものの、自分の状態を他人に判断してもらう、というものである。

その枠組みとして芥川龍之介「疑惑」(大正八年六月『中央公論』)、谷崎「柳湯の事件」[12] (大正七年十月号『中外』) が容易に想起できる。

「疑惑」では、「私がこれから話さうと思ふのは、その滞在中その別荘で偶然私が耳にした或悲惨な出来事の顛末である」(p.272) と

[12] 谷崎の「途上」(『改造』大正九年一月号) において、「衝突と云ふ事は、仰つしやる迄もなく偶然に違ひありません。しかし其の偶然が起つた場合に、怪我をすると云ふ事は、奥様の場合には偶然でなく必然です」(p.17) のように、「偶然」「必然」の問題は確かに先行論が指摘しているように、乱歩の「赤い部屋」と似通っている。ただし、「偶然」と「必然」の問題だけではなく、全作品の構成を考えた上、谷崎の「途上」より「柳湯の事件」のほうが乱歩の「赤い部屋」との共通性が見られる。谷崎の「途上」はむしろ志賀直哉の「范の犯罪」との共通性が見られるが、この点についての考察は別稿で行いたい。

する。そして、「私は或思ひもよらない出来事に出会ひまして、その結果とんと私にも私自身がわからなくなつてしまひました」(p.276)ため、「先生のやうな倫理学会の大家の御説を伺ひましたら、自然分別もつかうと存じまして」(p.276)「先生のやうな方の御耳に入れて」(p.276)と先生に判断してもらうことにした。「御退屈でも私の身の上話を一通り御聴き取り下さる」(p.276)と謙遜した立場に立っている。

先生に判断してもらうことは、一体自分は妻を殺したか否かという点である。

- 「あの大地震の時私が妻を殺したのは、果して已むを得なかつたのだらうか。—もう一層露骨に申しますと、私は妻を殺したのは、始から殺したい心があつて殺したのではなかつたらうか。(略)—かう云ふ疑惑でございました」(p.286)
- 「やはり妻を殺したのは、殺す為に殺したのではなからうかと云ふ、疑惑を認めずには居られませんでした」(p.287)
- 「あの場合妻を殺さなかつたにしても、妻は必火事の為に焼け死んだのに相違ない。さうすれば何も妻を殺したのが、特に自分の罪悪だとは云はれない筈だ」と云ふ一条の血路がございました」(p.287)

そして、「疑惑」の終盤では「憐むべき余生を送らなければならないくなつた事でございます。果して私が狂人かどうか、そのやうな事は一切先生の御判断に御任かせ致しませう」(p.291)と中村玄道が先生に語ったのである。

谷崎の「柳湯の事件」[13]は、青年の話を、「私」が伝える形式の小説である。青年は聞き手の一人であるS博士に、「僕は先生の前で、今夜の事件を何も彼も白状して、私が果して忌まはしい罪人であるかどうかを判断して戴きたい」(p.118)や「もしや今夜の殺人が事

[13] 谷崎の「柳湯の事件」の摂取問題として、志賀の「濁つた頭」が挙げられる。それについて、拙稿「谷崎の志賀からの受容—「柳湯の事件」における「濁つた頭」の摂取」(『台湾日本語文学報』第二十五巻、平成二十一年六月、pp.1-25【國科會計畫編號 NSC97-2410-H-328-008】)を参照。

実であり、その下手人が僕であつた場合にも、僕が心からの悪人ではなかつた事を、僕の犯した罪は僕の幻覚の祟りであつたことを、先生によつて証明して戴きたうございます」（p.119）という前提がある。

そして、殺人したか否かについて、次のように示されている。

- 「自分でも果たして人を殺したかどうか、ハツキリとした判断が附かないのです」（p.118）
- 「今夜の出来事も何處までが本當なのか、自分では全く分らないのです。人殺しがあつたのはほんたうで、下手人は僕でないのかも知れません」（p.118）

以上のように、告白の主な内容、つまり人殺しに関して、殺人したか否かを疑う意識の流れのような物語の骨格においても三作品は酷似している。

これらの作品の大枠としてはＡがＢの語った話を伝える形になっている。Ｂは何かの理由で、殺人事件を起こした。しかし、自身が人を殺したのか否かの判断もつかぬようになってしまう。以上がＢがＡに語った主な内容である。そして、ＢがそれをＡに判断してもらう。

ここで強調したいのは、人間の語った話を伝えるという構図を乱歩が積極的に取り込んでいることである。まずは、聞き手の視点から青年の告白に入る前の経緯を描写する。そして、視点人物は青年に転換し、青年の一人称語りによる告白―癲狂院に入れられるまでの顛末―が綴られている。さらに、作品は再び聞き手の視点に戻るというのが三作品の共通している構図である。

そして、このような三作品の類似は、構図だけではなく、他にもあげられる。例えば、告白する側の外観に関する記述部分も類似している。

「疑惑」では、話し手が話す前に以下のように描写されている。「不吉な予感と茫漠とした一種の責任感とが、重苦しく私の心の上にのしかかつて来るやうな心もちもした」（p.277）「やはり抑揚に乏

しい陰気な調子で、とぎれ勝ちにかう話し始めた」（p.277）とその無気味さが漂っていることが考えられる。

それに対して、「柳湯の事件」では、「その、飛び出るやうに大きく睜つた黒味がちの眼の色だけでも、たしかに異常な犯罪者に相違ない事を、どんな素人にでも頷かせるだけのものはあつた」（p.114）と「私」によって語られる青年の姿は、最初から「異常」のイメージを伴っていると言える。

「赤い部屋」では、前述したように、「彼の顎が、物を云う度にガクガクと物淋しく合わさる様子を、奇怪なからくり仕掛けの生人形でも見る様な気持で眺めていた」（p.310）とＴ氏の気味悪さを強調している描写が見られる。

三作とも告白される前に、告白する側の異常な描写が作品において、重要な機能を果たしていることが分かる。

類似しているのは以上のような基本的な物語設定だけではない。

「疑惑」では「先生のやうな倫理学会の大家の御説を伺ひましたら、自然分別もつかうと存じまして」（p.276）「先生のやうな方の御耳に入れて」（p.276）と、中村玄道は先生を話の相手として選ぶ。そして「柳湯の事件」では、青年は「頭脳明晰な學者」（p.119）であるＳ博士を話しの相手として選んだ。更に「赤い部屋」では、「赤い部屋」の「皆さん」を相手として選んだ。物語に関する人物設定は、三つの作品とも手当たり次第に聞き手を選び、そしてその相手に理解してもらうことを望んでいるということが言える。

このように、作品における共通性は細部にも見られる。

「赤い部屋」では、第二章で触れられたように、「百物語」を想起させるために、「蝋燭」の存在が必要の条件として存在されている。「古風な彫刻のある燭台にさされた、三挺の太い蝋燭が、ユラユラと幽かに揺れながら燃えていた」（p.309）「ロマンチックな蝋燭の光が、その静脈から流れ出したばかりの血の様にも、ドス黒い色をした垂絹の表に、我々七人の異様に大きな影法師を投げていた」（p.309）「蝋燭の焔につれて」（p.309）など「蝋燭」の存在が繰り

返し強調されている。

それに対して、「疑惑」のほうは、「やがて竹の筒を台にした古風なランプに火が燈ると、人間らしい気息の通ふ世界は、忽其かすかな光に照される私の周囲だけに縮まつてしまつた」(p.273)「私は何時もの通りランプの前にあぐらをかいて、(略)境の襖が無気味な程静か明いた」(p.274)「ぼんやりしたランプの光を浴びて、妙に幽霊じみた姿を具へてゐた」(p.274)など、異質な空間を醸し出す明かりの存在も読み取れる。

二作品とも異質な空間作りのために明かりの存在が作品に詳細に描写されていることが酷似している。

以上確かめてきたように、三つの作品には共通性が偶然とは言えないほど数多くあり、他作品からの模倣を随所に発見できる。乱歩は志賀の犯罪作品、芥川の「疑惑」、谷崎の「柳湯の事件」の物語設定、方法を借り、意識的に取り入れていることが歴然としている。

したがって、これらの作品が従来から影響関係の指摘[14]がある同じ谷崎の「途上」にも劣らぬほど、「赤い部屋」に影を落としているということが言えるのである。このように、作品における摂取の跡は明らかであるため、乱歩はこれらの作品を目にしていたことは確実であろう。

ただし、作品の終盤において、「疑惑」と「柳湯の事件」の二作品における決定的な相違が明確になったのである。そもそもこれら以外の物語の展開において三つの作品が異なっていたことを見逃してはならない。三つの作品は結末が大きく異なっており、その点が小説全体の差異につながっている。

五、どんでん返し

本章では、乱歩はあれだけ他作品における要素を摂取しつつも、あえて他作品を相対化する終わり方を描写しているという点について論じてみたい。

[14] 注 2 と注 3 を参照。

繰り返しになるが、他作品からの摂取を通してその関心を示した乱歩は、関心を認めつつ、一方違和を感じ、そして相反した物語の結末によって、自らの探偵小説観を示した。

「赤い部屋」の結末について、「牛の膀胱で作った弾丸なのですよ。（略）この弾丸が偽物だったと同じ様に、さっきからの私の身の上話というものはね、始めから了いまで、みんな作りごとなんですよ」（p.337）とTの種明かしが語られた。

そして作品の終盤におけるTの種明かしによって、ようやく告白した内容が嘘であるという事実に辿りついた。読者は最初から「狂人」の話を期待しながら、読み進めていく。その「狂人」の話はまさに結末に対しての、一種のどんでん返しとして機能しているのである。そのTの種明かしは、これまで読んできた読者の〈期待〉に反するものである。その読者の〈期待〉に反することも同時に聞き手の「皆さん」の〈期待〉に反することでもあるのだ。ただし、それは、深刻なものではなく、一種の悪戯とも読み取れるのだ。それによって、「赤い部屋」には読者の介入・読者への悪戯という仕掛けがかけられていると考えられる点において、芥川の「疑惑」、谷崎の「柳湯の事件」と対照的である。

「疑惑」の結末については、「果して私が狂人かどうか、そのやうな事は一切先生の御判断に御任かせ致しませう」（p.291）とお願いの後、先生は「私は楊柳観音を後にした儘、相手の指の一本ないのさへ問ひ質して見る気力もなく、黙然と座つてゐるより他はなかつた」（p.291）として作品は閉じられている。一体、中村玄道は狂人か否かに関する解釈は読者に委ねられている[15]。

したがって、作品は読者の側へと開かれていくものとなっているのである。本作のこの方法は読者の想像を掻き立てているのである。

それに対して、「柳湯の事件」の結末については、聞き手の一人である「私」が「真相」を明かした。読者は青年の話のみにしたがい、話が終わった時点で一体「真相」は何であるのか分からないままで

[15] 志賀の「濁つた頭」にも同じような構成が考えられる。注13の拙論を参照。

ある。しかし、「私」の説明によって、読者は自ら事件の「真相」など探らなくてもいいことになっている。谷崎の「柳湯の事件」には読者の〈期待〉に応える仕掛けがかけられていると考えられる。

以上のように、「赤い部屋」はまちがいなく「疑惑」「柳湯の事件」を踏まえたものでありながら、それらの作品との懸隔もまた大きいため、乱歩は結末の箇所で自分の独自性に拘泥しているのである。読者を積極的に参与させ、そして読者の判断を引っ繰り返すことによる読者への悪戯という探偵小説観は「赤い部屋」の中に実践したと言えよう。

どんでん返しという方法は乱歩作品の「二銭銅貨」(『新青年』大正十二年四月)、「赤い部屋」(『新青年』大正十四年四月)、「百面相役者」(『写真報知』大正十四年七月)などではよく見られるパターンの一つである。

最後にどんでん返しを用意した本作品は、細かな要素を他作品に仰いでいるとはいえ、乱歩本来の持ち味を読者に感じさせるオリジナル作品として成立していると言えるのである。

乱歩の研究史において作品の摂取関係に言及する際に、しばしば後年の乱歩自身の言及との関わりで論じられてきた。このような作家自身の言説が先行してしまい、これまでの摂取の問題が論じられてきた。そのような読み方では、作品における他の諸要素を無視してしまう可能性も考えられる。したがって、一度作家から離れ、作品を中心に検討することによってこそ、作品の新しい繋がりができるのである[16]。

[16] 江戸川乱歩作品の引用は、『江戸川乱歩全集』(平成十六年七月～平成十七年六月、光文社文庫)に拠る。引用文中の傍線、波線などは全て論者によるものである。森鴎外作品引用は『鷗外全集　第九巻』(昭和四十七年七月、岩波書店)に拠る。志賀直哉作品の引用は、『志賀直哉全集』(平成十一年十二月～平成十四年三月、岩波書店)に拠る。谷崎潤一郎作品の引用は『谷崎潤一郎全集』(昭和五十六年五月～昭和五十八年五月、中央公論社)に拠る。芥川龍之介作品の引用は『芥川龍之介全集　第四巻』(平成八年二月、岩波書店)に拠る。

〈付記〉本稿は呉鳳科技大学で行われた「2010応用日語教学国際学術研討会」で発表したものをまとめたものである。有益なご意見をくださった方々に御礼申し上げます。また本稿の審査にあたって、ご助言を賜った審査の先生方に厚く御礼申し上げます。

参考文献

青柳由紀（平成二十年十月）「江戸川乱歩初期作品論―〈幻想〉と〈写実〉をめぐって」『筑紫語文』

志村有弘編（平成二十一年十一月）『江戸川乱歩　徹底追跡』勉誠出版

新保博久、山前譲編（平成八年十月）『江戸川乱歩　日本探偵小説事典』河出書房新社

中島河太郎編（平成元年九月）『江戸川乱歩ワンダーランド』沖積舎

平野嘉彦（平成十八年五月）「『屋根裏の散歩者』から『猫町』へ―『群衆と観相学／群衆の観相学』の序にかえて―」『ドイツ文学』

藤井淑禎編（平成十六年八月）『江戸川乱歩と大衆の二十世紀』『国文学解釈と鑑賞　別冊』至文堂

藤井淑禎代表研究者（平成十九年五月）『江戸川乱歩と大衆の二十世紀に関する総合的研究』平成十六年度～平成十八年度科学研究費補助金　研究成果報告書、立教大学

百瀬久（平成二十年六月）「江戸川乱歩「心理試験」論―休筆の理由あるいは予見―」『東洋』

吉田司雄編著（平成十六年三月）『探偵小説と日本近代』青弓社